



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1936, 25(6): 471-488

ISSUE DATE:

1936-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184563>

RIGHT:

ではあるが、日本文に翻譯するだけの勞力を惜むのはよくないことだと思ふ。記事簡明であるのが本書の生命であらう。

(藤田)

●獨和言林

佐藤通次著 白水社發行 特價三圓五十錢

獨逸語の字引では、我等は登張・片山二氏のもので大正から昭和の時代を代表したものと、全國の青年がくびぎきしたものが、今や昭和の更新期に入つてこの新著を得るに至つたことを誇としなくてはならぬ。同僚古松文學士の熱心な助力校正を得て本書は正に獨逸語學生唯一の好指針たらしめてゐる、其特色は第一にゾーデンにより嚴密な正書法を用ひ、第二發音はジープスの標準發音に基き、萬國音標文字を以てし、第三専門に流れざる範圍でクルーゲの語原辭典によつて正しき語原解を掲げ、譯解もヘルマンパウルの辭典に従ひ言葉の意味の心理的・歴史的解釋を加へ、第五に前綴の意義を明にし、第六基本語に語根をしめし、第七外來語を明快にし、第八英語の同系語を照應せしめ、第九に譯語としての日本語を正確にするといふ九大特色が盛られてゐる。さうしてかうした特色はいづれも在來の獨逸語辭典には等閑にされてゐたのであるから、正に獨逸字典界での新生面を開いたものといひうるであらう。(藤)

●綜合新植物圖說

村越三千男著 照文社發行
定價 五圓

篤學の著者三十二年の苦心が報ひられて、こゝにこの四六

倍版四百七十一頁の大本と術語辭典百五十八頁、和名からの索引・漢名からの索引・羅旬名索引凡百十頁を合本にして約七百頁に膨らした大冊子が出來た、定價もやすいが、特價三圓五十錢は猶更にやすい。日本の植物名と、それがどこに、どういふ風に分布してゐるか、いかなる生活狀態であるかといふやうなことは本書によつて一日瞭然誠に有益な資料を與へられたものとして、著者に感謝せずには居れない。中等學校や小學校の圖書室は勿論、一般家庭にこれ位の植物寶鑑ともいふべき辭典は必備であるやうな時代が遠からず日本にも來なくてはうそであると思はれる。(藤)

雜報

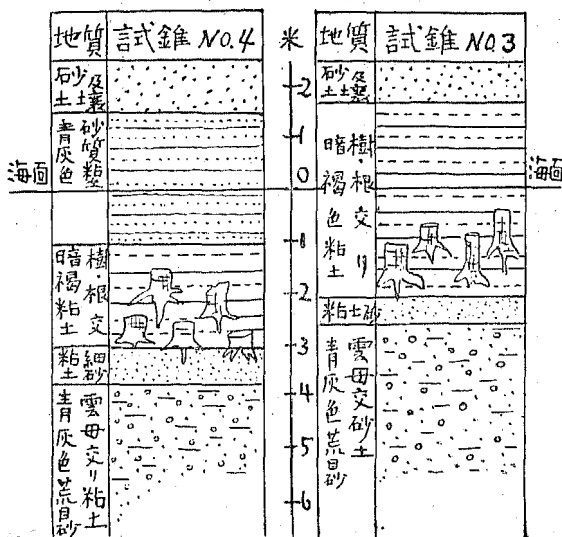
○丹後國宮津灣岸の埋没林

宮津灣頭に近く、宮津

町と獅子崎^{シイザキ}部落との間には東方の花崗岩地と宮津灣岸との間に狹長なる海岸平野があつて、海面より稍高く、約二・五米位の低き平地をなす。京都電燈會社に於て營造物建設のため、地表下二一米乃至二四米の試錐を行ひ、地盤の強度を測定したるに、海岸より凡一〇〇米を隔てたる地下、〇・八米乃至三・五米に於て二・〇米乃至三・七米の厚さを有する木屑混りの粘土層の分布廣きを知り、更に敷地施土のため土地を掘り下げたるに杉・樅等の針葉樹と思はるゝもの、其他闊葉樹と

思はるゝもの等が立木の儘、埋没し居ることを知つた。これ等の樹木中には年輪の數より推定して、三百年以上を経過せる老木、又は直徑一・五米に及ぶものもあり、心材は朽ちて空

宮津灣岸獅子崎附近試錐の一部



洞となれるものもある。表面は黒色、木炭狀をなせるものもあり、鋸にて截斷されたる面は仙臺附近の埋木よりも炭化進まず、所謂神代杉程度であつて、一見埋没後三—四百年以内

位經過せる樹木の如く見えるものもある。

埋没林の下層も上層も沖積砂礫層であつて、埋没林は現今の海面下二・〇米乃至三・〇米下位にあるを以て見れば、海岸は最新の地質時代に沈下の傾向を有したるものなるを思はしむ。附近に海岸平野發達の不十分なるは沈下に原因すべく、而して沈下速よりも山麓の崩積物堆積速の大なる部に於ては僅に海岸平野を發達せしめて居るのである。試錐記録は現今の海岸より三五〇尺を隔てたる地に行はれたるものであつて、數個の試錐は何れも八〇尺乃至一〇〇尺にて花崗岩磐に達してゐる。第三號試錐と第四號試錐とは一〇〇尺を隔つ。

(上治寅次郎報)

○錫蘭島の農産物

茶と護謨と椰子產品(實・コブラ・コナツト・油・搾油・纖維)はその三大重要輸出品で、この外にカカオ・桂皮・桂油・檳榔實・煙草等がある。日本へは黒鉛・プリストルファイバー・茶・護謨であるが、日本への輸出百七十五萬留比なるに日本からの輸入は一千二百二十萬留比といふ片貿易となつてゐる。

セイロン茶といへばリブントンティーだと早合點してはいかぬ。リブントン以外に多くの會社がある一八七三年以後茶の栽培が増加し、現在五十五萬七千エーカーの栽培面積を有し。最近五ヶ年間平均輸出二億三千萬封度一億三千百萬留比、世界第二位の大産茶國で、輸出は支那茶よりも遙に大となつた(印度第一位)その輸出の六割八分は英本國に向けられる。日

本へも約四十五萬封度を輸出する。

謾誤は一八七六年南米アマゾンから種子をとりよせ倫敦キユーガーデンに試作したのがもとで一九〇五年錫蘭のヘナラドゴダ及びベラデニア植物園の研究の功により、栽培ゴムの時代が来た、目下この島に六十萬七千エーカーの面積が之に供され、一九三五年八萬噸を生産した、但し土地狭小だから年産十萬噸以上にはなる見込はない。

椰子は海岸から千五百呎の地までの間に出来る。其栽培面積は米・ゴム・茶よりも大で百十萬エーカーに達する。島の西北部及び南部に多く印度及び蘭領東印度・ヒリツピンについて世界第四位の多産地である。椰子樹の材木としての効用。樹液を酒にすること、葉は屋根根になり、若葉は漂白して編物にすること、果皮の繊維がタワシになること、内果皮の木炭になること、最後にコブラをとること、など數へ来たらば椰子ほど重寶な木は稀である。

椰子生果實は年々外國へ二千萬乃至三千萬個輸出一本の木から平均一年三十個みのる。この果實から酒がつくれる。果をわけて仁をとり之を機械にて細割し、乾かしたものを Desiccated Coconut といふ、ビスケットの原料で英獨に輸出する。

コブラは中の仁を出して乾燥したもの、製油原料で滿洲の大豆と競争する位置にある。果實九百乃至一千五百個でコブラキャンディ(五六〇封度)が出来る。

椰子油は今のコブラを本島で搾つてとるので、セイロンで原料不足の時は馬來産を輸入する、人造マーガリン・サラダ油・石鹼・蠟燭に供する。

油糟はブンネツクといひ飼料及肥料になる。

果實の外殻は水につけてくしらした後槌でたたくと繊維が離れる。ブリツスル繊維は日本へだけでも四十七萬三千餘留比を輸出する。この外にマツトレス繊維、コアー・ヤーンといふ繊維もとれる。

椰子の殻炭は獨逸に輸出され防毒瓦斯マスクの料となつてゐる、硬炭だから火持がよい。

カカオはカカオ樹の種子で、椰子の生えぬ五百呎以上二千呎までの高地でつくる、果實が熟すると之をわけて種子を出し、種子の外殻にある粘液を醱酵させてとり、乾燥してから上・中・下の三種に別つて袋に入れる。

桂皮と桂油は六世紀の頃既に西洋に知られ、珍重された香料である。常緑樹で高さ二、三十尺周三呎位に生長する、この木の嫩枝が大きなステッキ、十尺位のびた時切り取りその皮をはぎ、外皮をとり、内皮を乾かして桂皮とする。支那産もあるが、品質はセイロンが世界一といふ、桂油は桂樹の葉を蒸溜してつくる。兩者を合して一九三四年には三十七萬留比に上つた。島の南部ゴール地方を主産地とする。

檳榔實も低地に出来る木の實で土人が口中にかむものが健胃・利尿・驅蟲の効がある。この外シトロネラ油・小荳蔻・パ

パイン等の農産がある。

猶又セイロンの黒鉛は主として日本に仕向けられる、クルネガラ・ルワンウエラ・バタワリカ・ゴール地方が鑛區で坩堝製造用として最上等である。

○支那の錫とアンチモニー

錫は中國の重金屬鑛産の一である、毎年産額約七千八百九十噸、世界産額の5%をしめる、雲南の箇舊は産額最多く廣西の富川・賀縣・鐘山、湖南の江華・臨武・彬縣、江西の南康一帶が之につぐ、湖南産は全部上海に送くられる、雲南産は一部外國向け、一部上海にくる、民國二一年上海に移入の錫は三百四十萬元、二三年には二百六十萬元である。箇舊は二二年に新式機械を据つけたので、探掘量が増加し品質改良が出来て、海外輸出が増加したので、上海へは移入量がへつた。

アンチモニーの海關統計では二三年上海移入の安質母尼は前兩年に比して十倍に激増し、二三年三百九十萬元に上る。元來支那は世界のアンチモニー産出の中心で長江以南の埋藏量は豊富である。然し最近は湖南新化の錫鑛山が最多の産出を誇つてゐる、安化湖潭も之につぐ産地である、外國では工業用としてアンチモニーの需用は廣い、機械の軸受・活字及家具・ポンプの管・硬化護膜・珐瑯・顔料等から軍用手榴彈に至る迄アンチモニーは良く其硬度を増加するものであつて之に對する需用は益々増加する一方である、就中外國の需要は多く兵器の製作に向けられてゐる、然し過去に於て湖南の

アンチモニーは全く顧みられず其輸出にも殆ど系統がなく其市場は外商の操縦する處となつて居たのであるが、二三年に湖南鐵礦貿易所が出来て統制管理をはじめたから量的にも質的にも改善されるに至つたから、湖南アンチモニーの前途は有望である。其産出は、純粹アンチモニー・屑アンチモニー・酸化アンチモニーの三種にわかれ、純粹アンチモニーが最多で上海・漢口から輸出されてゐる、二三年以來上海經由が増加したのは、漢口に於ける附加稅徵集がきつゝいからであつた。

○四川の桐油と白蠟

桐油は四川の特産で全支の桐油年産十二萬噸の中三二乃至三三%は四川産で湖南・湖北之につぐ、氣候溫暖で霜雪稀に冬も〇度以下には下らない。春季桐花開花前には氣溫降下し凍桐花といふ氣候になるのが、桐の産出に適當する。

四川の農民は勤勉で荒山僻嶺をも耕し甚しきは石塊の上に土を盛りて播種するものすらある、桐の種類は柴桐・米桐の二つで柴桐は果大なるも産量は少い、米桐は短小の木で種が多くフロリダ種に似てゐる、栽培また進まず施肥も少く殆ど放任であるから老樹は結實不定となり、幼樹は發育がわるい多くは山林の隙地に圍ひなしに作る、東雲陽・萬縣・開縣等に桐樹多く涪陵は桐油集中の要地で年々四萬乃至五萬擔の集散がある、黔江流域貴州から來るのである。

萬縣の附近、二十支里の九池に桐林場をつくつた、現在八千餘株、實採取五百七十公斤に達したが利益は出ない。其外

義瑞又は徳裕などの桐林經營を始めたがいづれも創設費や經營費が出ない、將來の成功を祈る程度である。

桐油に似たものに峨眉縣夾江・樂山一帶の白蠟がある、白蠟樹に虫がついて枝が白い蠟で固まる、秋冬になるとその白い樹枝をとつてきて火力でとかして白蠟にする、この樹も天財地寶の一であるが自然に任せてゐて飼養の研究が進まない、白蠟虫は四川雲南の産であるが、その虫を買つて樹枝に植ゑることになつてゐる、樹葉に繁殖した虫が蠟の殻をのこして止むと立秋頃から採取する、峨眉一縣で年額五千斤から一萬斤一斤二十四兩だといふ(百二十元)。

白蠟の用途は廣く、全國神前の蠟燭には必ずこれをいれる蠟燭といふ名もこれから起つたのである、桐油の外に梓油・麻油(胡麻)・菜油・豆油・棉油・花生油・茶油(茶の實の油)・烟油(芥子の實の油)・皮油(梓皮)・木油(木の實)・松油等四川の油は甚だ多いがいづれも的確な調査がなく生産數量は不明である。

○世界人絹市場一般

一九三〇年中やゝ衰退をみせた世界人絹は其後着々發展し、一九三五年には四億六千二百萬疋に達した、同時に技術の進歩の結果價格低廉となり、木綿及羊毛に代はらんとするに至つた、最初は歐洲が六五%・三・アメリカが二八%五・アジアが六%一であつたが一九三五年には歐洲五一%五・アメリカ二六%七と減退したのにアジアは二〇%八に躍進した、之を國別にすると

	一九三四年	一九三五年
北米	九五・五百萬疋	一一八・二百萬疋
日本	六八・三	九六・〇
伊太利	四八・三	七〇・〇
獨逸	四六・二	五五・〇
英國	四〇・四	四九・八
佛國	二九・五	三一・九
オランダ	九・六	一〇・七
ポーランド	四・四	五・二
白耳義	四・三	四・七
瑞西	四・八	四・一
ロシア	四・〇	四・五
カナダ	四・六	三・五
チエコ	二・六	二・七
スペイン	二・三	二・七
ブラジル	一・〇	一・八
其他	一・三	一・六
合計	三六七・一	四六二・四

即ち北米第一、日本・伊太利・獨逸及英國の順位でその合計は世界の九一%に達する、就中日本の人絹生産は目立つてゐて、生産過剩となつて有力會社は操短協定をやつた位で、この外にステイブル・ファイバーの生産も著増し、一九三五年伊太利では約三千萬疋に獨逸は二千五百萬疋、其他の國々も盛

んにつくつた。

伊太利は人絹輸出國として世界第一位で佛國・和蘭之につぎ北米や日本は國內消費が多い。

米國製産高の一％を輸出 獨逸は製産高の一四％を輸出

日本は同 一六％ 英 國 二〇％

佛 國 四二％ 伊 太 利 五九％

白 耳 義 八二％ オ ラ ン ダ 八五％

瑞 西 九四％

輸入市場としては獨逸、亞細亞では印度・滿洲・支那である、多くの國は大體國內で人絹の加工作業をやつてゐる。

人絹の市價は技術進歩のために低落の途をたどり、一九二三年一疋が六弗十七仙のものが一九三五年には七十五仙となつた、伊太利で一九二三年に三弗十二仙の品が一九三五年には五十六仙、八二％の下落である、英國は一九三四年最低値段で六十仙で輸出したところ、日本は四十仙で之に競争が出来た、最近五ヶ年間に五六％方の低落である。

將來日本や英國や佛國では益々人絹業が發達し、恐らく各國競ふて關稅障壁を高め自國産を保護するであらう人絹とステープル・ファイバーとの競争のために人絹は市價低落となり、日本の有力にして且有効な安値人絹は日を追ふて益々深刻な競争者として歐洲製産國の前に出現するであらう、いづれにしても人絹の發達は畢竟人絹市價を一段と低廉ならしむるものといへるであらう。

○アルジェンチンの羊毛

日本への輸出についてはブエノスアイレス羊毛輸出業者の手をへて品質の一定せる羊毛を買付けてゐるが、どうも割高であり品質も不向だといふ批難がある、その理由はアルジェンチンでは濠洲のやうにメリノ種一手に牧畜するといふわけがなく、其領土南北三千軒に達し氣候・地質等の變化の甚だしい大國の産出だから、その種類が甚だ多い、食用羊の飼育もあり一手の牧畜でないから羊毛といつても母羊毛・仔羊毛・腹毛・二番毛位に大ざつばに分類して市場に出る、長短・細さ・光澤・色合・夾雜物の多少を考慮するやうなことがない、故に買取つたものは、その中から更に嚴重仕分けの必要がある、日本ではメリノを濠洲から雜毛をニュージラランドから輸入してゐるので、將來雜毛が需用されることになるから、アルジェンチンに日本人が買取り機關と仕分け機關をつくり日本に適する羊毛を撰り出してくるやうにしなければならぬ。

亞國の羊毛生産地帯は、東北部メソボミア地方・中央パンパ地方・南部パタゴニア地方で東北部主要品種のコリエンテス及エントレリオス物はコリエンテス及コンコルデアより出る、中央部からはブエノスアイレス物が出るが、品質はよくない、南部パタゴニアにはメリノ及雜種細番手のものが多く、亞國羊毛中最良質であつて、本邦向に適する、しかし交通不便で買付困難である、けれども自然原毛の處置に困つてゐる牧畜者が多いのだから、日本人が奥地に進出すれば

有利疑ひなしといはれてゐる。いづれにしても強國羊毛は品種不統一だから買付けのために特に優秀な鑑定人がゐる、もし日本人がこの地方で羊毛に精通するならば、その利はかられないらしい、南部地方の雜種細物五十番手から六十四番手のものなどは日本に最適のものであるといはれてゐる、いづれにしても羊毛の専門家が養成されなくてはならぬ。

○小林貞一著 原始頭足類の系統分類解説

正誤表

誤

正

一三頁 十八行 生じたもの
 一八頁 五行 時代の研究の 時、氏の研究の
 一四頁 五行 Rhabdoprella Rhabdoporella
 二六頁 一九行

Ellesmereoceratidae Ellesmereoceratidae を

に入れてゐた。 Endoceratida に入れてゐた。

八五頁 七行 (一)介殼の横断面 (一)介殼の横断面
 九〇頁 一六行 頭足を發見 頭足類を發見
 九五頁 八行 破端 破綻
 九七頁 一八行 少し化石 少く、化石
 九九頁 一〇行 名稱 名稱
 一八〇頁 五行 原始的な型を 原始的な型と
 一八九頁 第八圖(圖の番號は右より1.2.3.4.5.)

一九〇頁 八行 好事家 好事家[◎]
 二七三頁 二行 steeoplastic stereoplastic
 三三六頁 四行 J. M. Clark J. M. Clarke
 三三八頁 五行 分類二〇〇 分類二〇〇
 三四〇頁 十五行 Stenosiphonate Stenosiphonate
 三四五頁 二行 Writer Writer
 三四五頁 五行 専門家の門では 専門家の間では
 三四七頁 六行 Grnland Grnland
 三四七頁 九行 fuy fur
 三四七頁 三五行 Nautilds Nautiloids
 三四七頁 四三行 Jour. Jour.
 三四八頁 六行 タイプ タイプ
 三四九頁 六行 寫眞板 寫眞版
 三五〇頁 二二行 コロタイプ コロタイプ
 三五四頁 二行 orthoceras Orthoceras
 三五四頁 四行 Greenlandoceras Greenlandoceras
 三五四頁 一一行 自信 自身

○日本古生物學會第三回例會講演會演題

の如く來る六月十三日(土)午後一時から表記の講演會が京都帝國大學理學部地質學・礦物學教室講義室で開催され左記の講演がある。一般好學者の來聴を期待することである。
 Foraminifera from the Kakegawa-district in Tôkûmi, Japan.
 Kiyoshi Asano.

Über Polymorphismus und Variabilität bei Operculina

japonica Hanzawa aus Tomorisawa, Kai, Japan.

Kōiti Suzuki und Seizi Inagaki.

A Supplementary Note on the Genus Temnotrema

and its Allies. Syōzō Nishiyama.

千葉縣 豐成の貝化石層 (關東南部新生代化石群其の4)

池邊 展生

千葉縣 大谷流の貝化石層 (關東南部新生代化石群其の5)

池邊 展生

千葉縣 平山の化石層 (關東南部新生代化石群其の6)

大炊御門經輝 鈴木好一
坂倉 勝彦 池邊 展生

Molluscan Fossils from the Raised Beach Deposit of

Takai, Tateyama-Hōzyō-mati, Tiba Prefecture,

Japan. (Studies on the Fossil Mollusca of the

Bōsō Peninsula. No. 1) Kōiti Suzuki and

Kenichi Ichimura.

On Some Species of the Genus Yoldia from the

Satomi Series of the Bōsō Peninsula. (Studies on

the Fossil Mollusca of the Bōsō Peninsula. No. 2)

Kōiti Suzuki

東京市小石川區江戸川公園の貝化石層 (關東南部新生代化石

群其の7)

化石ハイガヒの貝殼測定學的研究

大炊御門經輝

秋田縣由利・平鹿郡地方の高瀬川凝灰岩層の化石

大塚彌次郎

On a Gastropod Genus Siphonalia. Jirō Makiyama.

Non-marine Shells in the Nakdong-Wakino Series.

Teichi Kobayashi and Kōiti Suzuki.

Apical End of the Actinoceroid. Teichi Kobayashi.

熱河及び間島産 Actinoceroid の分布に就いて 松澤 勲

Proparian Olenidae and its Bearing on the Trilobite

Classification. Teichi Kobayashi.

馬山里層の帶に就いて 中村新太郎

A Fossil Roe Deer, Capreolus (Capreolina) mayai,

n. subgen. and n. sp., from the Inland Sea of

Japan. Shigeyasu Tokunaga and Fuyuji Takai.

Plant Fossils from the Stegodon Bed near Akashi.

Shigeru Miki.

On the Fossil Leaves of Cercidiphyllum from Japa-

nese Islands. Seidō Endō.

神戸附近産化石植物群に就いて

遠藤 誠道

北票含炭層産の植物化石に就いて 松澤 勲

A New Occurrence of Pseudoschwagerina (Schwage-

rina) princeps in Kyûsûyû, Japan. Haruyoshi Hujimoto.

以上